

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月10日現在

機関番号：14501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06974

研究課題名（和文）家族環境アセスメントモデルの有用性の検討

研究課題名（英文）Examination of the usefulness of the Family Environment Assessment Model

研究代表者

賀数 勝太（KAKAZU, SHOTA）

神戸大学・保健学研究科・助教

研究者番号：70782150

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、家族同心球環境理論に基づいて開発された家族環境アセスメントモデルの有用性を検討するにあたり、SFE（家族環境評価尺度）やFEM（家族環境地図）、SFE/FS（SFE家族症状モジュール）などの家族アセスメントツールの使用プロトコルを明らかにした。これにより、複雑で網羅的に実施することが難しい家族アセスメントにおいて、定量的な一方からの家族アセスメントだけでなく定性的な家族アセスメントも含めた新しい家族アセスメントモデルを確立できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、家族と家族を取り巻く環境を系統的に捉える家族同心球環境理論に基づいて開発された家族環境アセスメントモデルの有用性を検討することを目的とした。本モデルには12のアセスメントツールが含まれており、対象家族や捉える現象に応じて使用手順や様式を組み立てることが前提となっている。今回はそのうちの自記式質問紙などの量的な家族アセスメントが可能なツールと家族インタビューに用いる質的な家族アセスメントツールの使用手順やアセスメント方法を明らかにした。これにより、複雑な家族情報に対してより正確な家族のありようを捉えられる定量的かつ定性的な判断が可能な新しい家族アセスメントモデルを確立できた。

研究成果の概要（英文）：In this study, in examining the usefulness of the Family Environment Assessment Model, which was developed based on the Concentric Sphere Family Environment Theory, we clarified the use protocol of family assessment tools such as the Survey of Family Environment, the Family Environment Map, and the SFE Family Symptom Module. As a result, in complex assessments that are difficult to implement comprehensively, a new family assessment model has been established that includes not only a quantitative one-sided family assessment but also a qualitative family assessment.

研究分野：家族看護学

キーワード：家族機能 家族アセスメントモデル ミックス法 家族環境

1. 研究開始当初の背景

家族看護学では、臨床看護における異常の早期発見と早期対処と同様に、家族機能不全状態の家族の早期発見と早期支援が不可欠である。家族のウェルビーイングをアセスメントするモデルとして、家族環境アセスメントモデル(Family Environment Assessment Model, FEAM) (Hohashi & Honda, 2011)がある。これは家族と家族を取り巻く家族環境を一体化して捉え、系統的に理解する家族看護中範囲理論である家族同心球環境理論 (Concentric Sphere Family Environment Theory, CSFET) にもとづいた家族アセスメントモデルである。FEAMは様々な家族アセスメントツールで構成されており、家族全体としての健康状態を強く反映する家族機能状態を定量的に測定できる家族環境評価尺度 (The Japanese Version of the Survey of Family Environment, SFE-J) (Hohashi & Honda, 2012)や、家族情報を系統的に収集し定性的にアセスメントできる質問集である家族環境アセスメント指標 (Family Environment Assessment Index, FEAI) (法橋 & 本田, 2013)などがある。

家族機能状態を測定する尺度は、1980年代より多く開発されているが、家族員間の評価が乖離することなどが問題となっていた。法橋らはその問題を解決した家族機能評価尺度であるSFE-Jを開発している。さらにSFE-Jは、家族生活上で何らかの問題・課題・困難・苦悩を抱える家族機能不全状態の家族をスクリーニングできるカットオフ値が明らかになっている (Hohashi & Honda, 2016)。この両方の特長をもつ家族機能評価尺度は現在のところSFE-Jのみである。また、FEAIも同様に、CSFETにもとづいて開発されている家族情報収集を行う際の質問集であり、主に家族へのインタビュー調査の際に用いるアセスメントツールである。これら2つのアセスメントツールは定量的または定性的に家族をアセスメントできるツールであり、相補的に家族アセスメントを行い、量的分析と質的分析を統合したミックス法を基盤として、より系統的なエビデンスを構築するというモデルのもと成り立っている。これらを用いることで家族内での相互作用や、家族とそれらを取り巻く環境との交互作用を質的分析によって明らかにし、さらに家族という多次元のデータを持つ変数を定量的に分析することができ、具体的な家族支援につながる実践的なモデル構築に資すると考えられている。しかし、これまでの先行研究や臨地事例において、このFEAMによる家族アセスメントは数多く行われているが、その有用性は検証されていないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究では、FEAMの有用性を検証するために、家族機能評価尺度で量化された家族機能状態が、家族インタビューで得られた質的家族データより定性的にアセスメントすることができるかを検証することを目的とした。

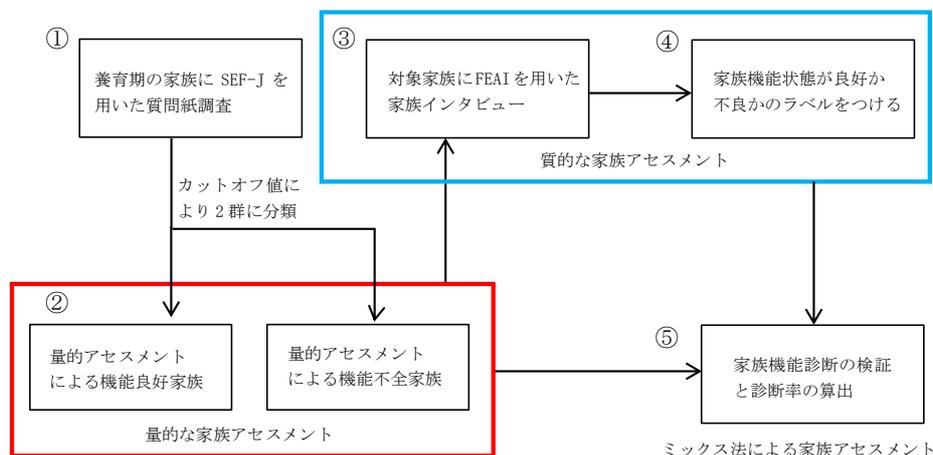


図 1. モデリングされた FEAM

3. 研究の方法

(1) FEAM のモデリング

本研究の理論基盤である CSFET に基づいた FEAM におけるアセスメントツールは 12 あり、それらの組み合わせによって家族アセスメントを行うことが FEAM の全体像である。実際の家族アセスメントにおいては、対象家族の状況に応じて必要なアセスメントツールを用いて家族インタビューや質問紙調査などを行うことが経験的に設定されているが、これまでの先行研究や隣地事例を通して経験的に設定されている FEAM を本研究目的に合わせて検証対象のモデリングを行なった。

具体的には、図 1 のようなアセスメントモデルとなり、①養育期の家族に SFE-J を用いた質問紙調査によって明らかとなった対象家族の家族機能状態を代表する家族機能得点 (Overall

Satisfaction Score, OSS) を算出し、先行研究で明らかになっている養育期家族のカットオフ値 (3.26) により機能良好家族または機能不全家族の2群に分類した。なお、SFE-J は30項目からなる自記式質問紙であり、家族のウェルビーイングに作用する家族環境を包括的にアセスメントできるように各項目に対して満足度得点 (Satisfaction Score, SS) と重視度得点 (Importance Score, IS) を“満足”から“満足していない”または“重要”から“重要ではない”の5段階で評価が得られる。本研究では、得点が高いほど家族機能状態が良好であると判断される OSS を②の量的家族アセスメントに用いた。

(2) モデリングされた FEAM の盲検的仮説検証

②の量的な家族アセスメントにおける結果が③および④の質的な家族アセスメントに影響しないようにそれぞれの分析を独立して盲検的に行い、⑤の段階で②の量的な家族アセスメントの結果と③および④の質的な家族アセスメントの結果がどの程度一致するかを判断した。

4. 研究成果

(1) FEAM のリモデリング

家族機能不全状態の家族をスクリーニング可能とする方法論の検討のために、国内外の家族機能評価尺度に関する文献検討および関連学術集会への参加による資料収集を行った。具体的には、古典的な家族機能評価尺度である Family APGAR において設定されているカットオフ値の設定に疑義があることや、家族のウェルビーイングをアセスメント可能としている理論とモデルの本研究への応用可能性について検討した。また、FEAM のモデリングにおいて、12 のアセスメントツールの使用順序の違いによる家族情報収集への影響の検討も行った。その結果から、FEAM において家族機能評価尺度である SFE-J と家族の範囲を同定可能な家族環境地図 (Family Environment Map, FEM) を FEAM の初期フェーズである家族情報収集に用いる際には、核家族と大家族では後者の家族形態が多く家族情報を整理する必要があるために、FEM を SFE-J による家族機能評価の前に使用することで家族構成や家族員間の関係などの家族情報が整理できることが示唆された。以上の検討内容から、当初の予定であった SFE-J を用いた質問紙調査と、膨大な家族情報を CSFET に基づいて系統的にアセスメント可能な質問集である FEAI を用いた家族インタビューの実施計画において、インタビューガイドの試案に FEM を加えて FEAM をリモデリングし、家族インタビュー調査の際に活用するインタビューガイドを作成した。

調査を進めている段階で、リモデリングした FEAM において FEAI を用いて質的な家族アセスメントのための家族インタビュー調査を進める予定であったが、これに代わり FEAM に含まれる12のツールの1つである SFE 家族症状モジュール (SFE Family Symptoms Module, SFE/FS) を用いることによって対象家族への家族インタビュー調査の際に家族機能不全状態にあるかをより焦点化して質的に抽出できることが示唆された。SFE/FS は、対象家族の抱えている現在または過去の問題・課題・困難・苦悩を同定可能なアセスメントツールの1つであり、対象家族の認識する家族機能状態が良好か不良かのラベルをつける際に有用だと思われた。以上の検討内容から、最終的に FEAM は図2のようにリモデリングされ、このモデルの有用性を検証することとした。

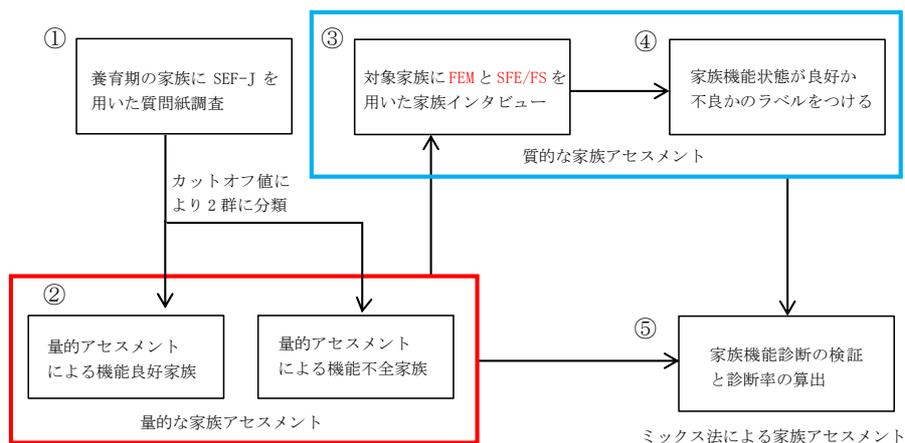


図2. リモデリングされた FEAM

(2) リモデリングされた FEAM の盲検的仮説検証

養育期の家族を対象とするために神戸市内の保育園や幼稚園および、その他の養育期にある家族をリクルートすることを目的として同市内にある自治会などの承認を得られた地域において参加協力者のリクルートを行なった。SFE-J と家族インタビュー参加の可否の確認票を含む依頼文を2,165部配布し、348部のSFE-Jを回収した。この中で家族インタビュー調査にも協力可能な4家族を対象にSFE/FSを用いて質的な家族兆候を把握した。具体的には、“こどもの不登校に対する家族外部環境との認識の違いへの対応の煩わしさ”や“家族員の単身赴任やこどもの不

登校などの家族イベントの重なりから派生した家族員の新たな健康障害”，“第一子の誕生による子育てと仕事の両立の困難”などの家族機能の低下がラベリングされる家族兆候が明らかとなった。このような家族兆候が見られた対象家族は4家族のうち3家族であった。

また、SFE-JのOSSやFEMから得られた家族インタビュー対象者の年齢、家族員の数、こどもの数の平均値と標準偏差はそれぞれ4.08±0.28点、40.0±4.69歳、5.25±2.63名、2.25±0.96名であった。

これらの結果より、量的な家族アセスメントにおいてSFE-Jによる家族機能得点がカットオフ値を上回る家族機能状態が良好だとアセスメントされた家族に対して、質的な家族アセスメントにおいてSFE/FSによって家族機能状態が低下傾向にある家族兆候が見られることが明らかとなった。

以上より、定量的な家族アセスメントによって家族機能不全状態と診断されたのは0家族であり、定性的な家族アセスメントで同様の診断がされたのは3家族であったことからSFE-JのOSSだけでは家族機能不全状態の家族を的確にスクリーニングすることが難しいことが示唆された。このような結果となった要因としては、対象家族が少ないことやSFE-Jの項目で家族生活上の問題・課題・困難・苦悩に関連する得点が低くても、全体の項目平均を算出するOSSの性質上、その他の項目の得点が高いことによって家族機能状態が良好となることが検討された。

本研究の結果より、複雑で網羅的に実施することが難しい家族アセスメントにおいて、定量的な一方面的な家族アセスメントだけでなく定性的な家族アセスメントも含めた新しい家族アセスメントモデル(図2)の有用性が示唆された。今後は対象家族数を増やし、本モデルの量的な家族アセスメントにおけるSFE-Jの効果的な活用について検証していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

- (1) Shota Kakazu, Junko Honda, Naohiro Hohashi, Establishing a cut-off point in the SFE-J to assess family dysfunction scores in preliminary groups of dysfunctional Japanese families, 13th International Family Nursing Conference, 2017.
- (2) 賀数 勝太, 本田 順子, 法橋 尚宏, 家族システムユニットの成長・発達区別にみたSFEの家族機能得点の評価に関する検討, 日本家族看護学会第24回学術集会, 2017.
- (3) 賀数勝太, 本田順子, 法橋尚宏, 家族同心球環境理論にもとづく家族アセスメントツールの使用順序の検討, 日本家族看護学会第23回学術集会, 2016.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。